



# ロンドンにサバティカルで 一年間行ってきました

—家賃と研究室と EU 国民投票—

第34回 谷口 忠大 (立命館大学)

**著者紹介**▶ 1978年京都市生まれ。2006年京都大学大学院工学研究科博士課程修了。博士(工学)。2005年より日本学術振興会特別研究員(DC2)、2006年より同(PD)。2008年より立命館大学情報理工学部助教、2010年より同准教授。2015年より2016年まで Imperial College London 客員准教授。主著に「コミュニケーションするロボットは創れるか」NTT出版(2010)、「ピブリオバトル」文藝春秋(2013)、「記号創発ロボティクス」講談社(2014)、「イラストで学ぶ人工知能概論」講談社(2014)など。ピブリオバトルの考案者としても知られる。記号創発システムの構成論的理解や機械学習技術の応用に関する研究に従事。計測自動制御学会学術奨励賞、システム制御情報学会学術奨励賞、論文賞、砂原賞、本学会論文賞などを受賞。言語コミュニケーションを実世界の中でボトムアップに構成する記号創発ロボティクス研究分野を推進している。

## 1. はじめに

英国にサバティカルで行かせていただいた。サバティカルとは、研究テーマを携えつつも、海外の研究機関(大学など)に1年間ほど滞在することで、日常を離れ新たな経験をし、リフレッシュする時間である。他の業界のことは知らないが、大学業界では有名で、海外の大学でも教授も准教授も6年に1回くらい取ることが多い。「なんてうらましい制度なんだ!?!」と思われるかもしれないが、大学業界とは本来そういう「うらやましい」世界なのである。ただし、ご存じ、働きすぎの文化と、空気の支配のえげつない日本では、制度はあっても「運用できていない」大学も多く、しっかりと運用し、教員がサバティカルを取得できている大学はそれほど多くないかもしれない。そんななか、立命館大学は私学なのに、この制度をかなり真面目に、しっかりと運用できている素晴らしい大学なのである。すごい。ちなみに、ケンブリッジなどでは、各教員がほぼ強制的にサバティカルを取らされると聞いた。サバティカルで大学を離れた研究者が、そのまま「帰ってこない」こともよくあるらしい。サバティカル先の大学などで新しいポストを見つけてしまうのだ。僕自身も結構イギリスでは「こっちでポスト探してるの? 探さないの?」などと言われた。

さて、この「グローバル・アイ」では、そんなサバティカル中に感じたことなどを、できるだけ「ゆるく」書きたい。最近、本学会誌では結構気合を入れた真面目な話を執筆することが多かったのですが、今回ばかりはリラックスしてblog気分で書かせていただければと思う。そういうわけで、適当に読み流されたい(笑)。

## 2. ロンドンの不動産事情

2015年9月から2016年9月の英国滞在中、僕はロンドンにある Imperial College London に滞在させてもらった。世界大学ランキングでも Top 10 常連の名門校である。ロンドン中心のサウスケンジントンの Exhibition Road 沿いにあり、Natural History Museum (自然史博物館) や Science Museum (科学博物館) の隣にあるというかなり文化的な立地である。ちなみにこれらの展示の観覧が無料なのも英国のサイエンスコミュニケーションの文化的レベルの高さをうかがわせるポイントである。展示内容も面白い。

ロンドン滞在は Imperial College London では機械学習を活用しながら個人へ適応するロボットの研究をしている Yiannis Demiris に受入教員になってもらえるということ、ロンドンにある都市の魅力や子供の学校のことなどを総合的に勘案して決めた。特に妻と

子供三人を連れて行くことになっていた。現地校のみならず日本人学校も選択できるロンドンは安心感もあった。特に不動産価格のことなどは意識していなかったのだが、これが甘かった。渡航の2年前くらいから大学のサバティカルを取るための書類仕事や申請などを進めて許可が出てから、ビザ申請や住居探しに進んでいった。

さて、知人からロンドンの不動産屋を教えてもらい、滞在先の賃貸住宅を調べ始めるのだが、そこで衝撃的な事実を知る。妻と三人の子供を連れて行くので、自分自身の仕事スペースも何とか確保するために 3 Bed Room (日本でいうところの 3LDK) を探していたのだが、飛び出してきた価格が 2,500 ポンド/月ほどなのだ。当時の為替レートは 1 ポンド 180 円台だったので、月 40 万円台後半である。耳を疑った。サバティカルでは大学が居住費を支払ってくれるわけではないので、なかなかの衝撃であった。結果的に別の不動産屋を当たるなどしながら、月 2,200 ポンドの家賃のフラットに住むことにした。まあ、1年間の期限付き滞在なので、出費に上限はあるのがせめてもの救いだが、全くサステナブルじゃない。なかなかハードである。1ポンド180円という為替レートは生活費面でももちろん厳しいのでダブルパンチである。事前にエクセルを使って収入と支出を

計算し、帰国時にどれだけの貯金が減っているかをシミュレートしてみたが、何とか耐えられそうだったので、滞在先に特に変更なく、覚悟を決めた。

ちなみに EU 国民投票の結果 EU 離脱が決まった後にはポンドが 130 円台めがけて急落したので、現在は、日本人にとってはありがたい状況になっており、これから行く人にとっては随分とマシだ。とはいえ、不動産価格はまだまだ高い。

ロンドンの不動産価格は国会での討論事項になるくらい社会問題化しており、基本的に「ロンドンで働く労働者はロンドンに住めない」といわれるほどなので要注意だ（これは東京でも似たようなことかもしれないが、日本で京都を離れたことがない僕にとってはよくわからない）。

### 3. 卒研生も修論生もない研究室。

#### プロしかない研究室

日本の教授陣とお話すると、卒論生や修論生の話がよく出るし、研究室の成果も修論や卒論の内容を学会発表していたりする。多くの研究者自身が卒論に独特の思い出をもっており、卒論、修論を大事にする文化が日本の大学文化を形成している。僕の京都大学の出身研究室でも、今の立命館大学の研究室でも多数派は学部生と修士学生だ。ところで、Imperial College London の研究室に行くと Undergraduate (学部生) も Master student (修士学生) もゼロだ。これはその他の大学でも僕の訪問した限りではすべてそうだった。全くいない。基本的には、Ph.D. candidate (博士課程学生) とポスドク、スタッフしかない。

また、基本的に Ph.D. candidate は何らかのファンドで雇用されるか、奨学金を受けるかしており、全額自腹で来ている学生などはまずいない。教授陣と話していても、基本的に予算がないと学生を取れないと言っていた。ちなみに、学生がいないと、その学生の分の机も部屋もなくなり、実質的に「研究室」は消滅する。卒論生と修論生で研究室を確保し続けることの多い日本の僕達は「ゆとり系」なのではないかと、

思ってしまった。

「支払われる人間」をプロと呼ぶのなら、これらの研究室はプロの集まりだ。これに比べたとき、「多くの研究室と呼ばれている日本の研究室は何なのだろう？」と思った。学部生、修士学生を中心に研究していたとしたら、大人と子供の戦いだ。年間 250 万円くらい支払う Ph.D. candidate のポジションは世界中から、そこに就きたい修士学生が応募してくる。日本で「うちに博士学生が来ない。博士学生に来てほしい」と嘆く先生（自分を含めて）も多いが、まずは、やっぱり、金銭面の条件を整えることが大切なのだろうと思った。とにかく、欧米から優秀な Ph.D. candidate を日本に呼び寄せたかったら、250 万円か 300 万円くらい積まないとダメなのだろう。また、同じ条件を国内に示せば進学したい学生もそれは増えることだろう。とりあえず、僕達に日本でできる改善は、まずは博士学生にガンガン給与を払って、大学研究室の場を経済的にも魅力的な場所にすることだろう。大学の国際化、国際化などというが、こういう足元の条件を国際標準化しないと、うまくいくはずがない。自分にもできることからということで、目下制度面を含めて検討中である。つまり、谷口研究室では給料を払うので博士課程学生を募集しております、ということをごっそり宣伝しておこう。

### 4. イギリス議会とディベート

「言語は文化」という言葉もあるように、言語的コミュニケーションは社会のさまざまなものを映し出すし、一方で、言語的コミュニケーションの様式、プロトコルが社会のさまざまなものに影響を与える。日本でも国際化、国際化という中で、英語教育の重要性が説かれるが、「ただ文法と語彙と書き方などを習うだけで大丈夫なのか？（大丈夫なはずがない）」という不安感をずっと僕もち続けていた。

現在の国際会議などでのコミュニケーションが英語とその英語を育んだ欧米社会のコミュニケーション様式に則って行われるのは事実であり、それ

に乗っかっていかないわけにはいかない。しかし、英語のコミュニケーションを行うときに、言語的構造はその一部でしかなく、そのコミュニケーションが前提として要求する様式、もしくはプロトコルのようなものがあり、その重要性も馬鹿にならない。

歴史的にさまざまな海外文化を吸収して、消化してきた日本文化であるが、日本人がどうもいまのところお口に入れても消化しきれなかった文化に「ディベート」がある。英国式ディベートは議会制民主主義生みの親の英国が誇る文化である。ディベートは民主主義政治の基本的な装置であるとともに、テーゼにアンチテーゼをぶつけて止揚していく学術議論の基本的なコンポーネントでもある。英国においてディベートは大変重要な存在であり、国語（英語）教育そのものが「自分の考えをきちんと話す」ということを大変重要視する。

英国に行ってから一番驚いたことは何かというと「国会中継が面白い」ということだ。これは本当である。見たことのない人は YouTube で検索してみてほしい。基本的にはディベートの構造がそこにあるのだが、大変テンポ良く、質問に対して首相が切り返したり、それに対して野党党首が切り込んだりする。そして、しばしばウィットの効いたジョークを挟んで、会場が爆笑の渦に巻き込まれたりする。日本の国会中継に慣れた人間としては、にわかになんか国会中継だとは信じられない。正直に言って日本の国会中継はテンポも悪いし、質問に対して質問をきちんと受け取らなかったりして、何を議論しているのかわからなくなる。

テンポの良いやり取りに、会場の笑い声……。ふと、日本でこれに似ている番組は何かあるだろう？ と考えてみると、「よしもと新喜劇」が頭に浮かんだ。いや、さすがにそれは言いすぎかもしれない。とはいえ、それぞれが自分の意見を明確に示しながら、基本的には言論の自由を認め、多様性を受け入れ、笑顔で議論を続ける。そこに何かの「型」があり、それがテンポ良く面白く、また、巧妙なレトリックがしばしば小気味良く、知的な部分を

刺激される。そんな構造が学術的議論の土壌としても存在しているのだなと感じた。

英国にいる間に起こった最大のイベントは「EU 離脱国民投票」である。2016年の年始あたりから徐々に国内でも盛り上がり始め、僕自身も英国生活に少しずつ慣れだし、ニュースなどにも気を配れるようになった頃であった。やおら、僕自身がニュースウォッチャーに転じていき、イギリスの議会の仕組みや、EUの仕組みなどを新聞などで学びながらEU国民投票の表や裏を理解していった。その中で、多くの公開討論会やディベートがテレビでも企画されており、それらを見る中で何か彼らがシェアしている文化が何なのかがわかっていった気がした。EU国民投票の結果自体はEU離脱になり、国内外からの批判も多いが、英国自身としては「国民にきちんと問うた」という民主主義そのものに誇りをもっているような雰囲気があり、もともと残留派だった新首相の Theresa May も離脱に向けて政治的プロセスを進めている。

## 5. これから

英国滞在中、ケンブリッジ、エディンバラ、プリマス、ハートフォードシャーなどいろんな大学に行って主に記号創発ロボティクスについての50分程度のセミナーやレクチャーをしてきた。日本での研究であろうが研究の内容に関しては良いものは聞いてくれるし、受け入れられるなあ、と思った。

ちなみに英国ならではかもしれないが、訪問して話すと「What is your

theory?」と問われる。ぜひ、読者各位もそれを聞かれたときの返しは準備しておいていただきたい。それは、日常の研究においても大変重要なことだと思う。自分の背景や貢献、理論や哲学はハッキリと自分の言葉で明確に話さないと伝わりようがない。そこに日本人的な「遠慮」や「謙遜」はほとんど障害にしかならない。ストレートな表現、ただし徹底的にフレンドリーな応答が不可欠だ。

基本的には日本人は「わかってもらえる」ことを当たり前にしてしまう。語らない美学のようなものがある。しかし、それは閉じた社会での構造であり、開いた社会では違うルールが作動する。僕達はそのルールを見抜き、体得し、日本の外も巻き込みながらコミュニティをつくっていかないといけない。

ところで、実際のところ、こういう話は、結局「暗黙知」なので、こんな文章を皆さんが読んだところで多分「ふーん」にしかならない。多分、自分で経験して感じたときに、「ああ、そういうことね」とわかるたぐいのものなのだ。

そういうこともあり、もし皆さんの大学にサバティカルの制度があればぜひ体験してきてほしいし、学生ならば留学の機会を得てみてほしい。また、あなたが大学の運営中枢に関わる人や、文部科学省の政策担当者であるならば、大学で先生方がサバティカルをとれるようにしっかり制度設計、運用をしていただくか、もしくは、圧力をかけていただきたい。研究者のサバティカル取得は多分、日本の研究国際化にクリ

ティカルだ。ちなみに1年という期間は「文化を吸い込む」には最低限の時間だと感じた。6か月だと厳しいだろう。本当に向こうのフィールドに溶け込むには博士学位を向こうの大学でとるくらいが必要じゃないのかな、と思った。

ちなみに、個人的にはイギリスは日本人が滞在するのにオススメな国だと思う。英語基準で暮らしやすいし、ヨーロッパの各国とも近い。また、もちろん、米国とは関係の深い国であり情報の行き来も多い。また、大陸の横の島国ということもあり、どうも日本と文化的に共通している面も多い気がした。特に僕みたいな京都人には向いている気がした。

日本人の先生方は働きすぎで、あまりサバティカルをとる話を聞かないが、サバティカルをとることで新しい視点を得るし、コネクションもできる。特に日本のように欧米の研究コミュニティから地理的に孤立した国では、教員にサバティカルを取ってもらっては、送り込んで人的ネットワークを形成してもらってくるというようなことが、国全体の大学業界全体の発展にも決定的に重要だろう。もしも、サバティカルを取る機会があれば、「自分のためじゃなく世の中のためなんだ!」と心のなかで積極的に言い訳をして、獲得し、エンジョイしていただきたい。

さて、他にも話したいことは山ほどあるが、とりあえず「グローバル・アイ」としては、紙幅の都合もあるので、このあたりで筆を置きたい。どこかでお会いした際には続きのお話ができれば幸いである。